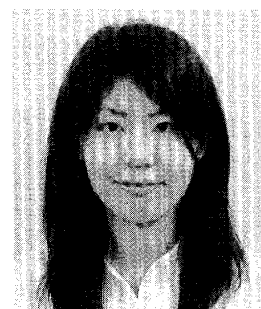


第14回日本色彩学会論文奨励賞

第14回日本色彩学会論文奨励賞を受賞して

Receiving 14th CSAJ Research Encouraging Award

佐々木 望 (株)リコー
Nozomi Sasaki Ricoh Company, LTD.



この度は第14回日本色彩学会論文奨励賞を受賞させていただき、誠に有難うございます。これもひとえに色彩学会関係の先生方、諸先輩方のおかげと深く感謝いたしております。とりわけ、研究環境を整えて下さり研究へのご助言をいただいた奈良先端科学技術大学院大学千原研究室の先生方には感謝してもし尽くすことはございません。

受賞論文：染織物の分光反射率計測に基づく退色過程のモデル化と原色推定, 日本色彩学会誌 Vol. 31, No. 3, pp. 171-182 (2007) は、非破壊の方法で退色した染織物の原色を推定することを目的とし、退色過程での変化について、変化の各時点での分光反射率を集合した情報の主成分分析結果に基づいてモデル化する手法を提案したものです。以下、簡単に受賞論文の対象となる研究についての着想の経緯と研究の過程について述べさせていただきます。

私は学部在籍中は民俗学を研究しており、東北地方を中心に信仰された「おしらさま」という像の型式分類を研究テーマとしていました。広い地域で信仰されるおしらさまは地域・家庭毎に少しずつ異なるものです。この異なり方に型式を見出すための分類項目の一つとして、私の研究ではおしらさまに着せられた衣服の色を対象としていました。しかしながら、江戸時代と思しき古い衣服の多くは退色しており、色の分類は予測に基づくものとならざるを得ませんでした。

そんな折情報考古学という学問が研究されていることを知り、大学院では非破壊で染色物の原色を知るツールの研究がしたいと考え、情報考古学研究を行っている奈良先端科学技術大学院大学千原研究室への進学を行いました。

受賞論文の研究内容となる手法にいたるまでには様々な紆余曲折がありました。「できる限り非破壊で」という私の希望に基づき、推定を行う対象には可視光を数十秒照射するだけでよい本手法にたどり着きまし

たのは、共著の眞鍋佳嗣先生及び大阪歴史博物館 中野朋子様からの多大なご助言によるものです。

また、本研究に欠かせない染織物試料は、中野様のご紹介により嬉染居 谷尾允康様にご提供いただきました。昔ながらの手法で染め上げた染織物は入手困難でしたので、谷尾様からいただいた試料によって本研究が成り立ったと述べても過言ではありません。

本研究の要となるモデル化手法及び日光に当てた試料に対する判別手法につきましては、共著の長縄美香先生から多くのご助言をいただきました。本研究の結果として、日光に当てた試料に対して強制退色させた試料から得られたモデルを適用しても許容色差範囲内で原色を推定できるという結果を得られましたのは、長縄先生のお力あってこそです。

さて、本研究の過程では紫外線を用いて試料を強制的に退色させながら、一時間毎に紫外線強度と試料の分光反射率との計測を行うということを数百回繰り返しました。一時間ごとに、紫外線をカットするオレンジ色のガラスと手袋を着けて実験室に通っていたために、いつしかガラスと手袋がトレードマークのように言われていました。冬でも日焼け止めが欠かせないのが悩み種でしたが、多くの皆様のお力により上記のような納得のいく結果を得られ、さらにこのような賞までいただけたことで、苦勞も報われた思いです。

上記のような結果の得られた本研究ですが、実際には数種類の布・染料に対するモデルでしかありません。今後、本研究を引き継いで下さる方が他の布・染料にも当てはまるモデルを作成されることを願っています。また、本研究が歴史・民俗の研究の一助になればこれほど嬉しいことはありません。最後になりましたが、入社後も執筆にご協力いただいた(株)リコーの皆様には大変感謝いたしております。

今後の色彩の研究の広がり、日本色彩学会の発展を心よりお祈り申し上げます。